

アルフィー

2005(平成17)年11月12日鑑賞(ホクテンザ2)

★★★★



監督・脚本・製作=チャールズ・シャイア/出演=ジュード・ロウ/ジェーン・クラコウス
キー/マリサ・トメイ/ニア・ロング/スーザン・サランドン/シエナ・ミラー/オマー・
エップス (UIP 配給/2004年アメリカ映画/105分)

……ハリウッドNo.1のハンサム男(?) ジュード・ロウが、「独身男のプレイボーイ哲学」を観客に語りかけながら、マンハッタンのまちで次々と女遍歴を……。そのお相手は、①セックスレスの人妻、②シングルマザー、③親友の恋人、④超リッチなビジネスウーマン、⑤美形のブロード美女などさまざま。しかし、その行きつく先は……? 俺ももう少し若い時にこの映画を観ていたら、女性観と人生観が変わっていたかも……?

プレイボーイも大変……?

今やハリウッドNo.1のハンサム男と言われているジュード・ロウが女たらしのプレイボーイ、アルフィーに扮して日夜大奮闘……。「ボクはいつも自由」「ボクは女に何も約束しない」「ボクは女に何も与えない」というその生きざまは実にカッコよく、あこがれるものだが、その結末は……?

恋のかけもちは、回転(?) がうまくいっているとうれしいが、それなりに大変。そうかといって、途切れるとさびしいことも。またアパートに居すわられた女は、追い出すのにひと苦勞……。さらに、親友の彼女とできたりすれば、いくらプレイボーイでもヤバイのは当然。他方、自分が1番若いと思っていたのに、超リッチな熟女から「あなたよりも若い男が……」と言われると大ショック……。

アルフィーは「ボクは自分の感情を抑えるのが得意」と言っていたが、この映画を観ているとプレイボーイも大変だということが、負け惜しみではなく、つくづくよくわかる。そのうえ、この映画がアルフィーに用意したラストはかなり過

酷なもの……？

マンハッタンにおけるイギリス人は？

この映画の舞台はニューヨークのマンハッタンだが、主人公のアルフィーはイギリス人という設定。それは、ニューヨークではヤンキーの若者よりもイギリス人の方が紳士的でウィットに富んだ会話が得意とされているため……？

そんなイギリス人の若者アルフィーをジュード・ロウがうまく演じているが、ちょっと鼻につくのはいちいちアルフィーが観客に向けてその解説をしてくれること。この手法は、ウィル・スミスが「デート・コンサルタント」という珍しい役を演じた『最後の恋のはじめ方』（05年）と同じ（『シネマルーム7』97頁参照）。微妙なアヤの解説は役に立つのだが、わかりきったことを得意気にしゃべっているのをみると少しうっとうしい感じが……。

アルフィーは意外と堅実な男……？

アルフィーはプレイボーイだが、親友のマーロン（オマー・エップス）とともにリムジンの運転手として働いているうえ、将来はこのマーロンと共同で同じような会社をおこそうという夢をもっている意外に真面目な青年。

さらに私生活においては、自分のアパートには女を連れ込まない主義らしく、そこはきっちりとしたもの。

運転手の仕事をしながら、とっかえひっかえ女遍歴をくり返すことができるのなら、私だって弁護士を辞めてタクシーの運転手になりたいと思うが、彼にそれができるのは、あくまでその端正な容姿と服装のセンスそして会話のテクニック（？）によるもの……？

アルフィーと5人の女たち

ごく大ざっぱに言えば、この映画はアルフィーの女遍歴の中で、彼がたどりつく人生観と女性観を明らかにするもの。したがって、アルフィーの身体の上を通りすぎていった女たち（？）合計5人は美人であることはもちろんだが、それぞれに個性的な女性。その詳細はここでは述べないが、その名前と立場だけを少々

……。

第1は、週一度のペースでデートしている人妻のドリー（ジェーン・クラコウスキー）。第2は、シングルマザーのジュリー（マリサ・トメイ）。第3は親友マーロンの彼女のロネット（ニア・ロング）。これは、ぐでんぐでんに酔っぱらったうえで、ハプニング的についやってしまったエッチ。すなわち、アルフィーがマーロンとロネットとのケンカを仲裁しているうちに……。こりゃ、絶対的にまズい……。

第4は、年上ながら美容界の女王と呼ばれる超リッチなりズ（スーザン・サランドン）。第5はスーパーモデル級の完璧なボディと美貌をもった金髪女性のニッキー（シエナ・ミラー）。

プレイボーイにも異変が……？

いくらプレイボーイでも、やはり男は精神的に弱いもの。そのうえエッチに関して女は欲望に限界がない（？）が、男はストレスがたまり精神的に追いつめられると、ついそれがきわめてヤバイ症状として現れることに……。

アルフィーにそんな「死より恐ろしい」症状が現れたのは、親友マーロンの彼女ロネットと一夜の過ちを犯してしまったうえ、何とロネットから妊娠したと聞かされたため。アルフィーの「仲介」によってマーロンとロネットはヨリを戻したものの、果たしてロネットのお腹の中の子の父親は誰……？

共同事業よりも女路線か……？

アルフィーに待っていたのは、ロネットとの結婚と郊外での生活を選択した親友マーロンとの別れ。マーロンとの共同事業を夢みていたアルフィーにとって、これは大きなショックだった。しかし、そこで新たにめぐり合った女性が超リッチな女実業家のリズだったため、アルフィーはたちまちそちらに興味が移り、気分は車の操縦よりも女の操縦に……。

そのうえ1人で過ごすことを覚悟していたクリスマスの日に出会ったのは、完璧な美しさのニッキー。こんな状況下、たちまちアルフィーは共同事業よりも女路線にのめり込んでいったが……。

落ち目になると……

仕事も、順調な時は何をやってもうまくいくが、ひとつ落ち目になるとなぜかあれもこれも同時にダメになってくる傾向が強い。そして、それはコト女にかけても同じ……？ この映画に登場する5人の女のうち、ロネットは別として、あとの4人はアルフィーにとって同時平行的な交際が可能だったはず……？ ところが、新しい女を見つけると古い女のことを忘れてしまうのが男の習性(?)で、今やロネットとリズの登場によって我が世の春を謳歌していたアルフィーは、既にドリーとジュリーとの仲は事実上過去の話となっていた。

ケチのつき始めは、「これは理想の女」と考えて、はじめて自分のアパートに引き入れたニッキーが、実はかなり扱いが難しい女だったということ。何とかうまくニッキーをアパートから追い出すことに成功し、今度はルンルン気分で用意周到にプレゼント用の花を選んで、リズの部屋を訪れたものの、さてそこでアルフィーが直面した厳しい事態とは……？

さらにパンチは次々と……

リズから見切りをつけられたアルフィーは、偶然カフェの中で1人座っているジュリーを発見。もともとアルフィーは、ジュリーとケンカ別れしたわけではなく、アルフィーが他の女との浮気の跡(?)をジュリーの家を持ち込んだことが原因で追い出されただけ。したがって、これを機会に昔の仲を復活させようとカフェの中に入り、偶然を装って話しかけたアルフィーだったが……？

そして、映画のラストはドリーとの遭遇。しかし、ここでも、男はいつまでも昔の女に未練を持つ動物だが、女はキレイサッパリ忘れてしまう動物だという現実を再確認する結果に……？

このように、パンチを3つも4つも浴び続けることになったアルフィーは、最後にさてどんな女性観・人生観に到達することができるのだろうか……？

2005(平成17)年11月14日記